
Refrain my life

花壇ガーディアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e f r a i n m y l i f e

【Nコード】

N 1 6 2 2 B A

【作者名】

花壇ガーディアン

【あらすじ】

あなたは、あなたが死ぬその瞬間、何を考えると思いますか？人は、突然その生涯を終える時、きっと後悔する事があるだろう。あれをしておけばよかった。

これを伝えておけばよかった。

時間はいくらあっても足りないから。

残される者に、すべてを伝えるために。

最後の瞬間を、もう一度生きて。

もう一度生きて、やり残した事が無いように。

優しくも悲しい三日間のお話。

my lover 1 (前書き)

初投稿となります

pixivさんに投稿していた小説なのですが

もっかい別サイトに投げてみたら？

と言われてしまつて……

ここに投下します

文才のない僕ですが

よろしく願ひします

my lover 1

December 18th

眠りから覚めると、薄くぼやけた視界は、白く染まっていた。この白は、私の部屋の天井の白。布団の白。そしてカーテンの白だ。そのカーテンの隙間から差し込む光は、まだ淡く、弱い。しかし弱いながらもはつきりと、命あるものに“朝”を知らせている。

布団にくるまったまま目覚まし時計を見ると、時間にはまだ余裕があるようだ。二度寝することを決めた直後、私の一番好きな曲が、部屋中に鳴り響いた。寝起きのせいでそれに即座に反応することができず、しばらくその曲を聴いてから、もそもぞと布団から這い出た。

その音の発信源である私のケータイを取る。着信画面には“俺様は神”と表示されているが、別に相手は神ではなく、私の友人。ヤツがふざけて勝手に登録したのだった。

「……もしもし」

『あ、ヒナ？起きてた、かな？』

眠さをなんとか堪えて電話に出ると、電話の向こうからは聞き慣れたム力つく声が聞こえてきた。

「いや、寝てた。誰かさんに起こされたんだよ」

『ああ、そりゃひどいヤツだ。こんな時間に叩き起こすなんて、信じられないね』

こいつ、人を叩き起こしといて、悪びれる様子もないらしい。「あー、そうそう。もうそんなヤツと話したくないからさ、ばいばい」

『あ、ちよい！ちよい待った！ごめんごめん！！』

適当にあしらおうとすると、今度は慌てて引き止められた。

「最初から謝ればいいものを」

『ん、ごめーん、ね？』

「謝り方が気に入らない。今度こそ、じゃあな」

『あ、ちよっ、待つ……』

っー、っー、っー。

あの生意気な態度と鼻にかかる声に腹が立ち、電話を切ってケータイを放る。ケータイは、ぼふ、と布団に着地して、それはもう鳴ることはなかった。あのバカは、電話を諦めたのだろうか。

カーテンを開けて外を見ると、外は真っ白。雪景色に覆われた美しい街並み。なんてことはなく、せつかくの美しい雪も、泥にまみれて茶色く淀んだ色になっている。なんと風情のないことか。

カーテンの外をしばらく眺めて、私は今日の授業のことを考えていた。体育があるのだ。普段は苦手な体育だが、雪が積もっていれば体育は体育館での授業になるだろう。体育館の体育といえば、そう。バスケットだ。私の唯一の趣味、そして特技である、バスケットボール。

私の父親はプロバスケットプレイヤーで、地方のチームで活躍している、有名な選手だった。私もその血を色濃く受け継いだのか、幼いころからバスケットをして遊んでいた。小学校のミニバスチームから中学校、高校とバスケット部で毎年レギュラー入りしていた。

バスケットには自信がある。女子バスケットでは、誰と1on1をしても負けたことはないし、フリースロー対決も、リバウンドも、常に勝ち続けてきた。父もよく褒めてくれたが、私はそれが嫌だった。私は、父を超えたかったのだ。父を超えるバスケットプレイヤーになりたいかったのだ。

父を超えるために、毎日練習をしていた。毎日五百本のシュート練習、三十分のハンドリング練習、三十分のドリブル練習、二時間以上の走り込みで体力も付けて、NBAの試合を見て研究もしてい

た。バスケに対して、あんなに真つ直ぐだったのに、必死だったのに、ついにその夢は叶う事がなかった。

父は半年前、母と共に事故で死んだのだった。

母とずっと仲良しだった父。母と二人で手をつないで買い物に行つてから、何時間経つても帰つてこない。心配して待っていると、家に警察から電話が来たのだった。“お父さんとお母さんが亡くなりました”、と。

病院に走った。無我夢中だった。私も、両親が大好きだったからいつも褒めてくれる、優しい父が好きだった。練習を見守ってくれる、優しい母が好きだった。バスケでは絶対に手を抜かない、厳しい父が好きだった。練習のしすぎで遅くなるときつく叱る、厳しい母が好きだった。

家からは遠い救急病院まで走っても、全く疲れなど感じなかった。バスケのために鍛えた体力が、こんなことの役に立つなんて思わなかった。

冷たくなった母と父の体が並んでいる姿は悲惨だった。猛スピードで突っ込んできたスポーツカーにぶつかり、二人とも、腰から下が切断されていたから。お父さん、これじゃバスケができなくなってしまう。お母さん、これじゃ一緒に買い物に行けなくなってしまう。私はあの時そう思った。

それから、私は親戚に頼らず一人で生きていくことにした。よく母の家事を手伝っていたし、大体のことは一人でできる。両親を失ったショックから立ち直るのには時間を要したが、最近ではすっかり気持ちも落ち着き、今もこうして生きている。

しばらくしてバスケ部も引退し、バスケができない日が続いた。こうして最近バスケに飢えた毎日を送っている。というわけで、回想もほどほどに、私は今日の体育が楽しみなわけだ。

「……ふわあ……っ」

一つ欠伸をすると、学校に行くために、その辺に放り投げてあった制服を着る。ろくに使いもしない勉強道具を鞆に詰めて、ケータ

イをポケットに入れた。洗面所で顔を洗って、眠気眼の自分を鏡で見た。仏頂面は、父譲り。ここは母に似た笑顔の素敵な女の子がよかった。背が低いのは母譲り。ここは父に似た高身長がよかった。いいところ取りなんてことはできないわけか。

玄関に掛けてあるコートを着て、マフラーを巻く。ここのところはマフラーがないと寒くてやってられないから、この安っぽい、毛玉だらけのマフラーにも助けられている。革靴を履いて、玄関にあるバッシュを袋に入れて、通学鞆と一緒に持った。玄関の鍵を開け、ドアを開けると、

「やあ、ヒナ？おはよう」

目の前にいたのは、爽やかな短髪（見ているだけで寒い）に長身（憎たらしい限り）の、眼鏡をかけた男だった。こいつが紛れもなく先ほどの電話の主であり、私の唯一の友人。こいつには本当に世話になっているのだが、この男、なにせ遠慮が足りない。先ほどのように電話で叩き起されたり、気がつくと家の中にいて、ご飯を作っていたりもする。洗濯物を勝手に畳んでいたときにはさすがに引いたが、どうやらこいつなりに、一人暮らしの私を手伝ってくれているらしい。気持ちは嬉しいのだが、こいつ、気持ち悪いんだ。

「……スニーカーだな、まるで」

「いやあ、否定できないかも？」

「ならやめてくれ。気持ち悪い」

「あはは。照れちゃって」

こいつのこの、にやにやとしたいやらしい笑顔。本当に腹立たしいことこの上ない。

「あのなあ。おまえ、さっさと学校行けよ」

「ん、ヒナも今家を出るところだったんじゃないの？一緒に」

「おまえと一緒にには行かないからな」

「ありや、つれないなあ」

さっさと横を通り抜けて、私は学校に向けて歩き始めた。こいつも私の後ろをついてきて話しかけてくるが、無視を決め込んでやる。

こいつは何故かいつも私の家までやってきて、私に付きまとうのだ。
「ね、今日の体育、一緒にバスケしようよ？」

「……」
「ほら、久々のバスケじゃない？楽しみだなあ」

「……」
「あれ、バスケしたくないの」

しつこく懲りなく話しかけてくるが、本当にうざったいことこの上ない。勝手に隣を歩いてくるし、こいつは背が高くて足が長いから、背の低い、歩きの遅い私に合わせてゆっくりと歩いている。さつさで行けばいいのに。

私は返事もしないし顔も見もしないのに、こいつは私の隣でぺらぺらと喋っている。耳障りな鼻にかかる声で、私に語りかけている。
「ああ、早くバスケしたいなあ」

バスケなら、私だつてしたいっつーの。

「ヒナ、無視はよくないようん」

ここで初めて、悲しそうにそう呟くので、とりあえず顔だけ向けてやった。こいつはそれを見て、希望に満ち溢れた笑顔を浮かべた。相変わらず気持ち悪い笑顔だが、確かに私に微笑みかけていた。何故こいつは、こんなに私に執着するのだろうか。幼馴染だからだろうか。

「バスケしよう、ね？」

「うるさいな。わかったよ」

「やった。決まり、だね」

結局こいつは私の隣を歩き続け、学校に到着した。こいつとはクラスが違うのだが、なんと運が悪いことに体育の授業は二クラス合同で行うのだ。楽しみにしていた体育の授業も、なんだか嫌な授業になりそうだ。

my lover 2 (前書き)

続けて3話まで投げます。

my lover 2

After 8 hours

放課後。机に突っ伏して寝ていた私は、鼻にかかる耳障りな声で目を覚ました。普段、授業中はほとんど爆睡をかましているの、放課後、誰かに起こされて帰宅することが多いのだが、今回はたまそれがこいつだっただけの話。しかし、どうも気に入らない。こいつだからか。

「ヒナ、帰るよ?」

結局、今日の体育の授業もバスケじゃなかったし。つまらない一日だった。

「うつさいな……勝手に帰れよ」

「そう言われてもさ。掃除の邪魔になってるよ?」

「……あ」

言われて気付くと、両手で箒をもって立っている、おさげの女の子がいる。彼女はこっちを見て、申し訳なさそうに笑っていた。

私は、掃除当番の仕事の邪魔をしていたようだ。迷惑をかけてしまったて申し訳ない。

「あ、急がなくていいからさ」

慌てて帰宅する準備をする私を見て、彼女は気を遣ってそう言ったが、実際、私が彼女の立場だったら、邪魔で仕方ないだろうな、と思った。しかしなんだろう。この彼女がまとう“不憫”オーラ、というか……。いや、オーラ、なんて言ったが、別にテレビに出ている金髪のバケモノに用はない。ただそんな雰囲気、彼女を包んでいた、というだけの話。

私が悪いのに、何故謝られたのだろうか。気を遣っているのはそ
ちだろくに　　というか。この子の名前は……なんだったつけ？
一緒のクラスではあるが、いかんせん他人と話をしないものだから、
人の名前とかそんなものはよく覚えていないのだ。

「それじゃあね、マキちゃん」

あ、そうだ、マキちゃんだった。そして、このバカ男は、レイ、
と呼ばれている。私も、どうしても必要な時はその呼び名で呼ぶ。

といっても、私からこいつに用があることなんて、ほとんどの
いのだが。

愛想笑いの下手な、不憫な女の子、マキと別れ、私は家路に就く。
せつかく持ってきたバスシュも下駄箱に置いたままで、日の目を浴
びることはなかった。

「バスケ、できなかったね」

と、私が考えていたことを見透かしているかのように、レイは私
に話しかけた。というか、またついてきていたのか。

「そうだな」

答えるのも面倒くさかったのでそう適当に返すと、レイは自分の
バスシュを持って、またにやにや笑っている。

「部活、見に行こうよ」

彼も元々は男子バスケ部員で、部長を務めていた。男バスと女バ
スはよく合同練習をしていたため、何度か練習試合もしたが、こい
つはかなり優秀なセンターだ。スモールフォワードの私は、よくシ
ョットを弾かれたのでよく覚えている。

私もこいつも部活が大好きだったので、別にこれから後輩たちに混
ざって部活動をして怒られないと思う。

「……それは、いいかもな」

「決まりだね。部活、行こうか」

たまにはいいこと言うじゃん。

二人で体育館に向かって歩いてみると、歩きながら、レイは何故
か深刻そうな顔をしていた。どうした気持ち悪い、と思っても言わ

ずにいたのだが、

「ねえ、ヒナ？」

レイのほうから話しかけてきた。

「なんだよ気持ち悪い」

「気持ち悪いかな？」

「ああ」

「そっか。なんとかしたほうがいいかな」

やっと気づいたのか？

「……って、本題はそこじゃなくて、マキちゃんんだけどさ。……どうして一人で掃除してたんだろうね？ヒナのクラスって、掃除は四人で組んでなかったっけ？」

「四人？ああ、そういえばそうだったな」

言われてみればそうだ。私も普段は、名前もわからないようなやつらと四人で掃除をしている。マキちゃんの他のメンバーも誰だか知らないが、一体何故一人で掃除をしていたのだろうか。

「今日の掃除当番は、堀田、脇田、瀬能、マキちゃんの四人のはずだね。あの三人、サボってるな」

「なんでわかるんだ」

「なんでって。ヒナのクラスのことだもん。なんでも知ってるよ？」

本格的ににストーカーじみてきたな。

「で、私はその三人、知らないんだけど。どんな連中だよ？」

「んーとき、サッカー部のチンピラどもだよ。わかんないかな？ついこないだまで、煙草吸って停学になってたんだけど……覚えてないかな？」

ああ、そういえば聞いたことがあるかもしれない。クラスから停学者が出て、机が三つ空席になっていたことも、辛うじて覚えている。そいつらが、掃除をマキちゃんに押し付けているということか。「そいつらのせいかな。かわいそうに」

「まったくだよねえ。ひどい連中だよ」

レイも頷き、笑顔も作らなくなった。こいつがにやにや笑いをや

めたときは、大体的場合、考え事をしているのだ。レイも表情には出さないが、かなり怒っているようだった。私だっていい気持ちではない。内気そうな女の子に掃除を任せて、そいつらは今頃遊び呆けているのだろうと思うと、腹が立って仕方ない。

堀田、脇田、瀬能。その三人の名前が、珍しく私の脳裏に焼きついていた。

my lover 3 (前書き)

今日の所はここまで投下です。

my lover 3

After 4 hours

きゅっ、ぐっ……ぱすっ。

バッシュが床と擦れるスキール音。ショットを打つの腕にかかる重み、おしてボールがネットをすり抜ける音。久しく聞くことのなかった音、バスケのために全身を動かす快感。それらに酔いしれ、私の体は疲れを知らずに動き続けていた。

あれから私とレイは二人で部活に参加して、私たちはそれぞれ別々に、久しぶりのバスケットを楽しんだのだ。練習試合などでいい汗をかいて、やがて生徒の下校時刻となった。そこで後輩たちは散り散りに帰っていったが、私は一人でシュート練習を続けている。いつの間にかレイもいなくなっていたのだが、おそらく、かわいい後輩たちと一緒に帰ったのだろう。

時刻は八時を回り、私はさすがに練習を中断した。ボールを片づけて、体育館の電気を全て消灯、鍵も閉めて体育館を後にした。

電気のない夜の学校は、妙に恐怖感を煽る。非常灯の緑の光だけが頼りの廊下を慎重に歩いていく。曲がり角を曲がって職員室が目に入った。ふう、と息をつき、光を見ると安心するのは人間らしいな、なんて思った。そのまま光が漏れている職員室に向かっていくと、

「……わっ!!」

「きゃあっ!?!」

物陰から何者かに突然抱きつかれ、柄にもない女々しい声を出してしまう。

その何者かを見ると、長身の、髪の短い、にやにやと笑う男だった。薄暗い廊下だが、それはもうはつきりと目に映った。

「……へへー、ヒナ、びっくりし」

ばきっ。

「ああ、もう、びっくりしたじゃないか！」

ム力つく！心臓が口から出るかと思った！

私を驚かせたこの男をグーでさんざん殴る。

「痛い！ヒナ痛い！」

「うつさい！ここで寝てろっ！」

満足するまでレイを殴ると、体を丸めて悲しそうに横たわるレイを放置して、息も荒く職員室に向かった。

職員室のドアを乱暴に開けると、煙草の匂いが充満した部屋の中に一人、パソコンを凝視しながら作業をしている女性がいた。彼女は女子バスケット部の顧問で、独身のアラフォー。職員室は当然禁煙なのだが、先生はヘビースモーカーなので、煙草がなければやってられないらしい。机の灰皿には、大量の煙草が山を作っていた。

「おお、ヒナか。お疲れさん」

気だるそうな眼をこっちに向けて、軽く手を挙げる。私は先生に小さく会釈し、机の上に体育館の鍵を置いた。

「いつもありがとうございます、先生」

先生は、バスケットに飢えた私に練習時間を提供してくれる。先生は私の家庭の事情や、バスケットに対する情熱を理解してくれている。それに甘えて毎日、というのも先生に申し訳ないので自重しているが、できるものなら何時間でも、何日でも練習をしたいのだ。先生はその間ずっと職員室で残業をしているが、この面倒くさがりの無精な先生が、一体何の仕事をしているのかはわからない。それこそゲームでもしているのではないだろうか。

「あ、そうだヒナ。レイのやつと会わなかったのか？」

「ああ、さっきそこで。そろそろ力尽きてる頃だと思いますよ」

「……はあ？」

いきなり背後から抱きつかれた、と簡潔に説明すると、先生はわっはつはと大声で笑いながら、啞えた煙草に火を点けた。

「ヒナ、そりやおまえ、あいつだつて男だ。男は皆ケモノなんだからな」

「そりやそうかもしれないけど、だつたら他の女が何人だつているじゃないですか。あいつ、あんな気持ち悪いのにモテるんだし。女つて生き物の神経がわかりません」

そう、レイは異様にモテるのだ。あの気持ち悪い声、顔、態度。あれが他の女子の目にかかれば、“かっこいい”らしいのだ。中には勇気を出してレイに告白する者もいるらしい。しかしレイはことごとくそれを断っているとか。

理由は知らないし、レイから直接聞いたわけではない。ただ、レイの友人である私に、レイのことを訊いてくる女子が多くて、こっちも迷惑しているのだ。

「おまえだつて女だろう。レイのやつ、かっこいいとか思わないのか？」

「あんなの、どこが！」

「その割にお前、いつもレイと一緒にいるじゃないか」

「あいつがストーカーみたいについてくるんです！私のことなんでも知ってるみたいな素振りで、気持ち悪いっတာなんです」

「でも、気持ち悪いにしてもだ。……認めてるじゃないか。バスケットプレイヤーとしても、友達としても」

言われてみれば、そうだ。あんなに気持ち悪くても、あいつは“友達”なのだ。いや、友達どころの話ではない。幼馴染であり、私のことを誰よりも理解してくれている。そして、友達である私のことを大切に思ってくれているんだ。

「……はい。確かにあいつは、私の友達です。いいバスケットプレイヤーです。私の幼馴染です」

「……へえ？じゃあさ、あいつがなんで、他の人からの告白を断ってるんだろ？な？しかも、おまえに隠して、だ。あんな飢えたケモ

ノが、新鮮な女を目の前に必死に堪えてる理由って、一体何なんだろうな？」

「そんなこと、聞かれても……」

「まあ、考えるこつたね。ヒナは人見知りもするし、自分に素直になれてない。おまえにはまだ、他人の気持ちを考える余裕がないのかもしれない。だから、自分の気持ちもわからないんじゃないか」

先生は私にそう言うのと、パソコンの席から離れて、マグカップを持って給湯室に向かった。

「今日はもう帰りな。外は真っ暗だ。おまえに何かあったら、私は責任とれないからな」

煙草に混ざってコーヒーの匂いがする。今からコーヒーを淹れるなんて、まだ仕事をするつもりなのだろうか。

「あ、はい。失礼、しました」

「ん。気をつけるんだぞ」

職員室から出て、先生に言われた言葉が頭の中を掻き回す。

私の気持ちなんて、私が一番よくわかっている。それなのになんだ。まるでレイのことを、私が邪魔しているみたいじゃないか。

そんなの知るか、私は、レイじゃない。私は、私なんだ……。

私は自分にそう言い聞かせて、家路に就いた。その道中、珍しくレイはついてこなかった。

my lover 4 (前書き)

次の日となりました。どうぞ続きもよろしくです。

my lover 4

December 19th

朝。私はいつの間にか布団を剥がして眠っていたのか、寒さに目を覚ました。昨日の夜は家に着いてすぐ、風呂にも入らずに眠ってしまったので、昨日着ていたジャージのままの姿だ。若干汗臭い体のままだったので、今日は布団も洗濯に出そう。

起き上がってカーテンを開き、窓の外の光に目を細める。今日も外には雪が積もっていて、相変わらずの寒い朝だ。寒さに体を震わせながら、とりあえずバスタオルと制服を持って、シャワーを浴びた。

温かい湯を浴びながら、私は昨日の先生の言葉を思い返していた。

私の、気持ち……。

私はあいつを認めているのは確かだ。しかし、長年気持ち悪がってきたあいつのことを、私が好きになるなんてことはないはずなのに。あんなことを言われたぐらいで、なんで私はこんなに動揺しているんだ。

というか、だ。あんな奴のために頭を抱えているこの時間が、無駄で仕方ない。さっさと忘れよう……。

そう思った矢先、家のインターホンが鳴った。二回。

「……あいつだ……」

二度もインターホンを鳴らしてくるこの遠慮のなさ。間違いない。私はさっさとシャワーから上がり、服を着た。湯冷めしないように冷たい制服の袖に手を通し、玄関先まで出る。と、

「はい、ヒナちゃん？」

玄関が勝手に開け放たれ、外からレイが入ってきた。手にはコンビニのビニール袋が握られていた。そして、レイの顔には、目元に絆創膏が貼ってあったり、頬に痣があったりする。何故かぼろぼろのレイに驚いて、目を丸くしてしまった。

「お、おまえ、どうしたんだよ」

「ん、ああ、これ？」

「まさか、昨日の私ので、か？」

「まさか。ヒナ、顔は狙わなかったじゃないか」

「そうだけど……じゃあ、一体どうしたんだよ」

「……いやあ、ちよつと昨日ね。階段から落ちちゃって」

「嘘つくんじゃないよ、下手くそ」

「あ、あはは。まあ気にしないでよ」

そんな下手な嘘をついたあたり、こいつは何も聞かれないのだろう。私に隠し事をするなんて珍しい。

昨日、私が顔を狙わなかったのも事実だ。一応こいつの売りは顔らしいし、そんな商売道具（？）を狙ってはかわいそうだと思って、もしかして、心配してくれてるのかな？」

「……うるさいな。そりゃ心配するだろ」

「あはは、嬉しいなあ。最近冷たいもんね、ヒナ」

「おまえだって、最近気持ち悪さに磨きがかかってるぞ」

「そうかなあ。ヒナに嫌われちゃう前に直さないとね」

「安心しろって。もう嫌いだから」

「ありゃ」

レイはにやにや笑いながら、玄関の小上がりに腰掛ける。そのまばたんと後ろに倒れ込み、玄関に寝転がった。下から覗かれる形になったが、私はスカートの中にジャージを穿いているので、何の問題もない。

「……つまないだろ？ジャージなんか覗いても」

「んー、いやいや。ヒナのスカートの中だからねえ。ジャージでもモモヒキでも、なんでも大歓迎　んぶぶーう」

顔を踏んずけてやった。

「そっか。ヒナ的に、今のが気持ち悪いわけだ」

「言う前にわかるだろ、それ」

「でもさ、抑えられない衝動、っていうの？……あ、そうそう、はい肉まん」

レイはコンビニ袋からまだ温かい肉まんを取りだして、私に差し出した。

「お、気が利くじゃないか。風呂上がり肉まんなんて、聞いたことないけど」

「いいねえ。乙なもんじゃないかな」

「そうか？」

雑談もほどほどに、私たちは今日も一緒に学校に向かう。道中、どうもレイのことを意識してしまう私がいた。

「はあ、今日も寒いねえ、ヒナ？」

「……ああ、そうだな」

私がレイの私生活の邪魔をしているのだったら、何故こいつはこんなにしつこく私にかまってくるんだ。関わらなきゃいいのに。

「いやー、今日から腹巻き巻いてきたんだけどさ。すっごい暖かいんだ。いいでしょ？ヒナも巻いてみる？」

「……ああ、そうだな」

ただの友達なんだし、私だっていつまでもこいつと仲良くしてられるわけじゃない。高校生の今のうちぐらいだろう。卒業してしまえば、きっと私たちは別の道を歩み、別の人生を送るだろう。それなのに、私は人生のうちこんなにも、こいつに甘えてきたんじゃないか。こいつが勝手にやってる、なんてのは嘘。こいつのせいで、私は自分の弱いところを隠しているだけ。自分の欠点を、こいつに押し付けているだけ。本当に嫌なんだったら、私はこいつをぶん殴ってもやめさせればよかった。それこそ昨日みたいに。こんなにも私のことを心配してくれているこいつを、私はどう思っているのかなんて、そんなこと、口に出すまでもない。

私は、こいつのことが好きなんだ。嘘じゃない。私の気持ちなんて、ずっと昔から変わっていなかった。こんなに気持ち悪い笑顔も、気持ち悪い言動も、行動も、何もかもが私の全てだった。それなのに、私はその気持ちに蓋をしていた。気づかないふりをしていた。だから先生は、あんなことを言ったんだ。

「ね、ヒナ。今週の日曜、一緒にどこか出かけようよ」
「……ああ、そうだな」

いつだってこいつは私の隣にいるんだ。私の隣で、にやにや笑っているんだ。私はそれを失いたくない。他の誰かにこいつを奪われるなんて、嫌だ。こいつがいない人生なんて、嫌だ。

父と母を失って、私の心はこんなにも脆くなってしまった。こいつに支えられて、甘えて生きてきたからだろうか。歩幅を合わせて隣を歩くこいつが、愛おしくて仕方ないなんて、私はどうにかなくなってしまったのかもしれない。

「やったあ。じゃあさ、最近寒いでしょ？腹巻きだけじゃ心許なくてさ。上着を買いに行こうかと思ってたんだけど、どれがいいか一緒に選ぼうよ。ヒナに、決めてほしいなあ」

「……ああ、そうだな」
「ねえヒナ。さっきから、まともに聞いてないでしょ」

いや、どうにかなくなってしまっているんだ。間違いない。私は恋をしているんだ。その時点で、既にまともじゃない。まったくもって、異常なんだ。

「ヒナったら！」
「……ん、あ、悪い。ぼーっとしてた」

レイの声でふと我に帰る。どうやら適当に相槌を打っていたのがバレたようだ。

「でも、約束は約束だからね」

「な、何がだよ」

「日曜日。一緒に買い物に行こう」

「なんだそれ！私は嫌だぞ！」

「ダメ。さつきヒナ、行こうか、って言ったら、そうだな、って言ったもん」

「そ、そんなの滅茶苦茶じゃないか。聞いてなかったんだって!」

「そりゃヒナが悪いんでしょー。聞いてなかったんだから」

「う」

正論である。

「考えごとしてたのかな?」

「ま、まあそうだけど」

「珍しいね。ヒナが考え事なんて」

「まるで私が何も考えないで生きてるみたいな言い草じゃないか」

「やー、そうかも?」

「む。聞き捨てならんぞ」

レイは楽しそうに笑って、私の頭に手を乗せた。頭をぐしゃぐしゃと撫で回され、私は抵抗するのだが、

「ヒナ!」

「ちょ、なんだよ、やめ　っ!?!」

突然、肩を掴まれたかと思うと、強い力で抱き締められた。昨日みたいな悪ふざけではない。ぎゅっと、私の顔はレイの胸に埋まっていた。突如として喋ることも呼吸することもできなくなってしまう。私は、レイの背中に手を回し、背中をぼふぼふと叩いて抗議した。冬だから厚着をしているらしく、ダメージはないらしい。

「　っ!　　っ!?!」

「ヒナ、俺さ。日曜日、楽しみにしてるから。だから、一緒に行こうよ?」

レイの心音が聞こえる。漫画みたいに鼓動が速くなっている、というわけではなく、いたって普通、だった。慣れているんだろうかとも思ってしまった。私は背中を殴る手を止め、力を抜いてレイに身を委ねた。

すると、レイは腕の力を緩め、なんとか呼吸することが許された。「ぶはっ、苦しいっつーの……おまえ、いきなり何するんだよ!」

「……ごめん、ヒナ。我慢できなかった」

レイが、いつにない真面目な顔でそんなことを言うもんだから、私は次に紡ぐ言葉を忘れかけてしまった。こっちまでおかしくなりそうだ。

「あ、あれか。……男は、ケモノ……なのか？」

「あはは、誰からそんなこと聞いたんだよ。……でも、そうかもね。まるでケモノだ」

レイは私を離すと、さっさと先を歩いていってしまった。私はしばらく呆然とその姿を見ていたが、

「レイ！待てよ！」

気がつくと、声を張り上げていた。

自分でも説明できない思考が、渦を巻いていく。やがていろいろなものを吸い込み、奔流となつて喉から溢れ出していく。

「おまえだけじゃないっつーの！私だって、我慢できないときぐらにあるっつーの！私だって、日曜日……楽しみだっつーの！！」

大声なんか出すもんじゃない。力が入りすぎて、顔が熱い。今頃私は顔が真っ赤だろう。

レイは立ち止まって振り返り、私の声に驚いて目を丸くした。

「……そっか。ありがと」

「わかったら、置いてくな、バカ」

「……あはは、ごめんよ」

私も震える足を一歩前に出して、レイの隣を歩く。レイの顔を見ることはできなかったが、きつとにやにやと笑っていただろう。私も、そうであったように。

my lover 5 (前書き)

恋愛作家さまに向けてですが、書いてて恥ずかしくなるとき、ありません？

my lover 5

After 5 hours

うわああああああ!!

私はなんであんな恥ずかしいことを言ってしまったんだ!!

昼休み、私は購買の焼きそばパンを齧りながら、目をぐるぐる回していた。あんなの、生き恥を晒したただけだ。ああ恥ずかしい……。うぐぐぐ……」

ついうなり声を上げてしまい、隣の女の子にぎょっとされてしまった。

「……あの、ヒナちゃん。大丈夫……?」

「ん、あ、マキちゃんか」

隣の女の子はマキちゃんだった。昨日の掃除の件もあつてか、マキちゃんは気軽に私に話しかけてくるようになったようだ。というのも、マキちゃんも内気だし、私もどうやら話しかけづらい人、らしい。それはレイに言われたのだが、確かに好き好んで私に話しかけてくる人は少ない。友達ができた、のかな。

「そういえば、ヒナちゃん。知ってる? 昨日、堀田くんたち……ゲームセンターでケンカしてたのが見つかって、また停学だって」

「停学? あいつら三人がか?」

「うん、また停学、だって。こないだ帰ってきたばかりなのに、かわいそうに」

「三人でケンカしてたのか。仲間割れなんて、バカらしい」

「いや、それがさ……実はね、私のお姉ちゃんが、それ見てたみたいなんだ。これはここだけの秘密なんだけどさ。学校では、三人で

ケンカしてた、ってことになってるみたいだけど、実は、堀田くと脇田くと瀬能くんの三人が、誰か一人とケンカしてたんだって。三対一、ってことかな。それは学校側は知らないんだけど、その人ウチの学校の制服着てる人だったんだって」

話を聞くに、堀田ら三人は、うちの学校の制服を着た何者かに、三対一で負けて、それを知らない教師共は、堀田、脇田、瀬能の三人が仲間割れをしている、と勘違いしている様子。

「へえ、難儀なもんだ。あいつら昨日掃除サボって、マキちゃんに押し付けてたんだろ？天罰じゃないのか、それ」

「それはさ、いいんだよ。三人で、楽しく遊べたなら……」

「おいおい。なんかおかしいだろ、それ。マキちゃん一人に掃除押し付けて、何がいいもんか」

「で、でも」

「それとも何か。マキちゃん、一人で掃除したかったのか？」

「いや、違うけどさ……」

「じゃあ、いいじゃないか。あいつらに天罰が下ったんだろ？それにしても、すごいな、そいつ。一人であいつらをシメたんだろ？ウチの学校にも、そんなヤツがいたなんて」

「そうだよな。ちよつとかっこいいなあ」

「……いや、でも、おかしくないか？同じ学校なら堀田たちだってそいつのこと知ってるはずだろ。そしたら普通、そいつのことチクるだろうし。なんでそいつは停学になってないんだろうな」

「あ、そういえばそうだよな。なんでだろ。三人以外の停学者はいないと思うし……口止めとか、されてるのかな？」

「……いや、三人がかりで一人にボコられたのが恥ずかしくて言えない、とか。大方そんなとこだな、きつと」

「あ、なるほど。あの三人、プライド高そうだしね。納得」

「……でも、誰なんだろうな。お目にかかりたいもんだ」

「そうだね……気になるなあ」

と言っていた最中、教室のドアから、レイが入ってきた。寒い寒

い、とか言いながら、小走りで私たちの方に向かってくる。

「お、マキちゃん。ヒナと一緒に食事なんて、もの好きだねえ」

「失礼な」

「レイくん。よかつたら、レイくんも一緒にどう？」

「ありゃー、俺はもう食べてきちゃった」

「そっか」

「でも、ご一緒してもいいかな？」

「うん、どうぞどうぞー」

レイは私の前の席に座り、私と向かい合った。

「あれ、レイくん、ほっぺ……どうしたの？」

「やー、昨日階段から落っこちちゃって」

「わ、痛かったでしょ。大丈夫？」

「あはは、全然大丈夫。心配しないで。……で、何の話してたの？」

「ああ、そうそう。もしかしたらレイなら知ってるかもしれないな。

おまえ、なんでも知ってるもんな」

「あはは、そうでもないよ。それで、何？」

「ん、堀田ちゃんと脇田ちゃんと瀬能くん、昨日、ケンカして停学にな

っちゃったんだって」

「ああ、その話、朝のHRで言ってたな。それで、そいつらやつ

けたのは誰だ、って話か」

「そうそう。レイくん、何か知ってる？」

レイは少し考え込んだように唸ったが、

「……ごめん、知らないや」

と、両手を広げてお手上げの様子。

だが、一つ不可解な点が。

「そうか。おまえなら、と思っただが」

「んー、残念」

HRで聞かされたのだとしたら、三人が仲間割れをしている、と思っ
ているはずだ。こいつが、もう一人のことを知っているはずが
ない。

私はレイの方をじつと見ると、

「あ……そ、そうそう、マキちゃん。俺、明後日が誕生日なんだ！」
なんて、話をそらすレイ。まったくもって、嘘が下手なヤツだ。
まあいい。このことは後でゆっくり聞こう。

「あ、そうなのー？おめでとー！じゃあ、月曜日に何かあげちゃうよ！」

「あはは、ありがとー！」

「はー、プレゼント目当てかよ」

「いいじゃんか。年に一度の特権だよ？」

「じゃあ私、レイくんとちようど一週間違いなんだね。私、二十八日！」

「おー！じゃあ俺もお返しに何かあげるからね！」

「レイ、お返しと言えば三倍返しだな。男なら」

「マジかー！……マキちゃん、あんま高いものくれないからね」
ね

「んー、じゃあ、千円ぐらい遣っちゃおうかな？」

「ぐっは、三千円は痛い！百円とかでいいって！」

三人組の話題が過ぎ去ってから、そんな他愛ない話で談笑して、
珍しく昼休みを楽しく過ごした。

my lover 6 (前書き)

やっぱり文章書いてる瞬間が一番楽しいわけで……投稿なんて自己満足だと思っんです。読者様に面白いよ、って言うてくれると嬉しいもんですよ

my lover 6

After 4 hours

今日は部活に参加せず、真っ直ぐ帰宅することにした。相変わらず後ろにくっついてくるレイが、今日はいつにも増してよく喋る。

「やー、ヒナ？ずいぶんマキちゃんと仲良くなつて、よかったねえ。俺以外に友達がいらないんじゃないかと思ったけど、全然そんなことないみたいで安心したよ。ヒナも段々成長していくんだなあ……つて、なんでこんなに上から目線なんだろうね、あはは。あ、そうそうヒナ、聞いてよ。昨日家帰ったらさ、母さんが電子レンジの使い方よく知らなかったみたいでさ。卵入れてレンジ爆発させてたんだ4よー！今時卵レンチンしたら爆発するなんて、知らない人いたんだなー、なんて思つて！いやーびっくりしたけど面白かったんだ。そうそう爆発と言えば、ウチのクラスの科学の担当のアフロ、今日髪切りに行ったみたいでさ、アフロしぼんでんの！めっちゃ笑ったわー！アフロでハゲごまかしてたのにさ、しばむもんだからハゲ感丸出し！超うけるったらないよなー」

ああうるさい。こいつに限つて、人間が冬に冬眠しないことを呪うね。

「うつさい、ちょっと静かにできないのかおまえは」

「あ、そう？うるさかった？ごめんごめん。帰り道、話題がないとつままないじゃない？」

「おまえの話聞いてるぐらいなら、黙々と歩つてる方がマシだ」

「あちゃー、ひどい言われよう」

それからレイも静かに私の隣を歩いていった。

「というか、だ。朝あんなことがあったのに、こいつは何故こんなにもいつもと変わらない態度なのだろう。私なんか調子狂いつ放しだっというのに。」

「……レイ、おまえさ。明後日、誕生日なんだろう？」

「気がつくとは私は、そんな話題をレイに投げかけていた。」

「そうだけど、何か買ってくれるの？」

「バカ言え、おまえ、私の誕生日に何くれたよ」

「ん、イモリの黒焼き」

「そう。こいつは私の誕生日（もう過ぎた）に、イモリの黒焼きをくれたのだ。迷惑極まりない。」

「ネットで調べたけどよ。媚薬じゃねーかアレ」

「そうだよー。いやー、冗談だよ冗談」

「ふざけすぎだっつーの。媚薬なんか使っても、誰がおまえなんかに欲情するかよ」

「え、使ったの!？」

「使っわけないだろ。バカバカしい」

「やっぱり？」

レイは相変わらずへらへらと笑い、そして私に歩幅を合わせてついてくる。私たちのことを全く知らない人が見たら、こいつが私の従者か何かだろうと勘違いするかもしれない。

「まあそれは忘れてよ。来年はちゃんとしたのあげるから!」

「はいはい。期待しないで待ってるよ」

本当は嬉しいくせに、口からはそんな強がりが出てくる。そこではつと気づき、これは、来年も一緒にいよう、ということなのだろうか、なんて、とんだ拡大解釈までしてしまう。私もとうとう、頭のネジが吹っ飛んだのだろうか。

「……っと、ヒナン家、着いちゃったね」

「ああ。じゃあな」

気がつけば私の家の前で、レイはにっこりと、いや、にやにやと笑いながら手を振った。当たり前のことだが、一緒に帰るのはここ

まで。

「日曜日、楽しみにしてるからね」

「あ、ああ。……私もだよ、言わせんな恥ずかしい」

「あはは。そのぐらい素直になってくれた方が、かわいいと思うよ？」

「う、うるさいな！さっさと帰れよ！」

「言われなくてもー！ばいばい！」

「じゃーな」

レイはそれから、こっちを振り返ることなく、走って帰っていった。

今思い返すと、その後ろ姿は、いつもより大きく、そして愛おしく見えた。

誕生日、何か買ってやろうかな。

私は珍しく、そんなことを考えていた。

「……あーもう、ムカツク」

そうばやきながらも、明日、あいつへのプレゼントを買いに行く計画を立てていた。のだが、

「……しまった」

そう。三人組のことを訊き忘れていたのだった。明日聞こう。

my lover 7 (前書き)

久々の投稿です

my lover 7

December 20th

朝、私はいつもより遅めに布団から出た。

今日は土曜日。学校はないが、私は早起きをした。普段なら昼過ぎまで自堕落な睡眠を取っているところだが、今日は、明日に迫ったレイとの買い物と、レイの誕生日のために、一人で買い物に行くことにしたのだった。

クローゼットを開けても、女の子らしいかわいい服なんか入っていない。私らしいと言えばそうかもしれないが、いつまでもジャージの女の子なんて、いくら私でもどうかと思う。今日中に、明日着ていく服と、レイへのプレゼントを買いにいかねければならないのだ。そのためには、まずは腹ごしらえ。私は台所に立って、寝巻の袖を捲くる。冷蔵庫を開けて、朝食の食材を取りだした。卵、かにかま、マヨネーズ、バター、ねぎ……、ケチャップもあるので、オムレツでも作るうか。

炊飯器を見ると、昨日設定したタイマーで、既に炊き上がっている。文明の利器は素晴らしい。

ねぎを切って、それを入れたボウルに卵を割って、塩を少々と、マヨネーズを大胆に入れ、それを菜箸でかき混ぜる。混ぜすぎない方がおいしいので、白身を切っていくぐらいでちょうどいい。マヨネーズが、焼き上がったときにいい味を出すのだ。これは私の母から教わった、一家のおすすりめである。

フライパンを熱して、バターを敷く。焦げないうちに卵を入れて、焼き始める。我が家のキッチンには火力がいい。卵焼きにしても、高

火力で手早くおいしく作れてしまうのでとても気に入っている。

慣れた手つきでさつさとオムレツを完成させると、茶碗にごはんと大きめの皿にオムレツを盛った。ケチャップをかけるときに名前を書いてしまうのは、人間の性だと思う。

コップに注いだ牛乳と、箸を持って、一人きりの食卓に着いた。

「……いただきます」

「はい、召し上がれ」

「うわっ!？」

独り言のつもりが、返事をされて驚く。背後から聞こえてきた声の正体は、やはりレイだった。とういか、こいつぐらいしか、家に入ってくるヤツはいない。親戚だったら事前に連絡を超越すだろうし。

「……ヒナ、ドアノックしても気づかないんだもん」

「インターホン鳴らせよ、この不審者」

「もうそんな仲じゃないでしょ。合鍵くらい渡してほしいんだけど?」

「やなこった」

やはり、勝手に入ってきていたらしい。こいつに驚かされるのはもう慣れた。いつても、こないだの学校で驚かされた時には本当に死ぬかと思っただが。

「ヒナ、俺もオムレツ食べたい」

「もう好きにしろ。ごはんよそってこい」

「やったあ」

レイはいつものにやけ顔で、そそくさと茶碗にごはんを盛ってきた。箸も適当に取ったようで、向かい側に座って、私のお気に入り箸でオムレツをつつき始めた。

「……美味いか？」

「うん、最高」

「そ、そか」

「これでいつでも俺の嫁にこれるな」

「……やめろよ気持ち悪い」

「うはー、今俺、将来俺と家庭を築いてるヒナの姿を妄想してた」

「本格的に気持ち悪いなおまえ」

「今までは本格的じゃなかったのかな」

「いや、今までだって酷かったさ」

「だろうねー」

「……おい、私の分なくなるじゃないか！」

「あつ、ごめんごめん」

レイは容赦なく私のオムレツにがつつき、私が食べる分が少なくなってしまった。

「あ、あはは。そう、ダイエットだよ！」

「おまえ、私が太ってるってか」

「ん、脂肪なら足りないくらいじゃないかな。特に胸のあた　　ぐはっ」

机の下で、レイの向こう脛に蹴りをかました。

「貧乳で悪かったな。文句あるなら、牛みたいな女の牧場臭いオムレツでも食ってこい」

「ひどい言いようだなそれ」

食べ終わった二人分の食器を片づけながら、私は今日の予定を思い出す。今日はこいつのために出かけるんだ。こいつと一緒にいるわけにはいかない。

「そうだ、今日は一人で出かける用事があるからさ。食べ終わったならさっさと帰ってくれ」

そう告げると、レイはこの世の終わりのような表情を浮かべた。

「えー！今日、ヒナの家でだらだらする予定だったのに！」

「勝手に決めるなよ、まったく。私だって暇じゃない。おまえにかまってるんじゃないよ」

といったものの、今日の用事はこいつのための用事。こいつにかまっているだけ。本当は毎日が暇なのかもしれない。

「……えー、今日は一日中暇なんだよう。かまってよう」

「ダメなもんはダメなんだよ」

「ぶー」

こいつが駄々をこねるなんてなかなか珍しい光景だ。よほど暇で仕方ないんだろう。

「……あーもう、わかった。私の部屋でマンガでも読んでろ。別にこの際なんでもいいから」

「えっ、いいの？ダンスとか漁るよ？」

「それはやめろ」

「……わかった。我慢する」

「そんなに漁りたいのかおまえ」

食器を洗いながら、拗ねた様子で机に伏せているレイを眺めていた。

こいつは一体、私のことをどう思っているのだろうか。ただの友達、だろうか。

そりやそうだろう。本当に私のことを好いていてくれるなら、もつと照れとかがあるだろう。好きな人の家に勝手に上がり込むか？好きな人のダンス漁りたいとか言うか？

「そりや漁りたいさ。ヒナのダンスだよ？」

「なんだおまえ。ウチのダンスに希少価値なんかないぞ」

レイは立ち上がって自分の腹を叩き、満足そうに笑った。

「……オムレツ超美味しかった。また作ってね」

こいつは、私に対して思ったことを全て口にするヤツだ。友達なら友達って言うてほしい。好きなら好きって言うてほしい。

「ああ、またいつか作ってやるさ。そうだな、明日、一緒に買い物行くんだろ？弁当ぐらいなら、その……作ってやらんでもない」

「ホントにつ！？やったあ！！」

「そんなにはしゃがれても。大したもん作れないぞ？」

「めっちゃ楽しみにしてるから！」

「わ、わかった」

レイは本当に嬉しそうに、心の底から笑った。それをじっと見つ

めて、こいつのこの笑顔を独占したいと思う私がいた。卑怯な願望かも知れない。恥ずかしい願望かもしれない。しかし、私はもう止まらないほど、たまらなくこいつを愛してしまっていた。我慢ができなくなってしまうていた。

「明日、楽しみだな。そのために、今日は我慢！大人しく、家でじっとしてるよ」

「帰るのか？」

「うん。ヒナ、忙しいみたいだし。家主のいない家に居座るのも、ちよつとね」

「勝手に上がつといてよく言うよ」

「あはは。……じゃ、また明日！」

「ああ。じゃあな」

レイは小さく手を振って出て行った。私はその後ろ姿を見て、自分がこんなにも恋の病に冒されているのだと実感していた。

さあ、今日は忙しいぞ。

「よし、準備準備！」

手を叩いて、今日の準備を始めた。

my lover 8 (前書き)

まだまだですねー
ぶっちゃけた話こっからスタートみたいなもん
ですが

my lover 8

A f t e r 2 h o u r s

私は、買い物のために、電車に乗って町に繰り出していた。私の住む町の中で一番大きい駅前商店街。今日は土曜日なので人も多く、私は背が低いので、人ごみに埋もれてしまいそうだった。ここに来れば、大体のものが揃う。私はここで、明日のために買い物をすることにしたのだった。

必要なものは、レイへのプレゼント、明日着ていく服、そして一応、あいつに作ってやる弁当の食材。

気合を入れて、大きめのバッグを持ってきたのだ。これで大丈夫。私は町を歩きながら、まずは服屋を探していた。明日、私は何を着ていくのだろう。女の子らしい服の方がいいのかな。でも今さら女の子らしい格好なんて、レイに笑われたらどうしよう。だったらラフな感じの方がいいのかな。

いろいろと思案しながら歩いていると、何度か名前を聞いたことがある服屋の前に差しかった。

そうだ、店員さんに聞けばいいんだけど……私は人見知りだ。困ったな。いきなり壁にぶつかった。とりあえず、店に入ってみよう……。

自動ドアが開くと、そこは未知の世界だった。服が陳列しているだけの質素な店ではなく、あちこちの装飾が、妙に女性らしい雰囲気を感じ出している。ここは、私がいるべき場所ではないんじゃないかなにかと思うくらい。

「いらっしゃいませー」

店員の声にふと我に返ったが、完全にトんでいたと思う。私はとりあえず散策的な気分で、店内をうろつくことにした。

置いてある服のどれを見ても、私が着るような服ではない。かわいらしい服の数々に、目が眩みそうだった。私のジャージ姿とのあまりのギャップに落胆していると、

「……ヒナちゃん？」

突然、後ろから話しかけられた。一体何かと思ったが、後ろを振り返ると、そこには見慣れた少女。

「ま、マキちゃん！」

「ヒナちゃん、珍しいね。お買いもの？」

マキちゃんは普段はおさげにしているが、今日は髪を下ろしていて、いつもとは違う雰囲気。彼女は、この店の従業員がしているバツジを胸につけている。服装も、いつもの地味な制服とは全く違う、かわらしいものもこした服を着ていた。

「まあ、そんなとただけど……マキちゃん、ここで働いてるのか？」

「うん。ずいぶん前からここでバイトしてるの」

「そ、そうなのか」

意外な人物との遭遇に驚いているが、これはチャンスかもしれない。

「……マキちゃん、相談があるんだけど」

「……？」

私はマキちゃんに、全てを話した。レイのことが好きだということ。明日、一緒に買い物に行くために服を買いにきたこと。でも、何を買えばいいかわからないということ。

私は初めて人にこんなことを相談したのだが、マキちゃんはまっすぐ私を見ながら、真摯に話を聞いてくれた。本当にいい子だと思う。

一部始終を話すと、マキちゃんは目を輝かせていた。

「ヒナちゃん、かわいい！」

「な、な、なんだよそれ！」

「だってさ、一生懸命なんだもん！私まで嬉しくなってきた。応援しちゃうよ！」

「あ、ありがとう」

「で、かわいい服とか着てみたいんだよね？」

「いや、そうなんだけど……似合うかな……？」

「きつと似合うよ！ヒナちゃん、かわいいもん」

「あう、変な気分だ」

こっちおいで、と、マキちゃんは私をどこかに連れていく。いろいろな商品棚をぐるぐると歩き、いろいろな服をあてがってはまた歩き。その最中、マキちゃんは一生懸命なようだった。私のために一生懸命になってくれるのは嬉しいが、服選びって、こんなに大変なのか。

「……じゃ、これ、試着してみて？」

「え、し、試着？試着するのか？」

「もちろん。着てみて小さかったり、似合わなかったりしたら困るでしょ？」

「う、そりゃそうだけど」

服を持たされ、試着室に入る。カーテンを閉めてから気づいたが、こんな短いスカート穿くのかっ。

ジャージを脱いで、始めて見る服を着ていくが、どうも勝手がわからない。悪戦苦闘していると、マキちゃんが外から声をかけてきた。

「ヒナちゃん、大丈夫？」

「だ、大丈夫じゃないかも」

「んー、どれどれ」

マキちゃんは容赦なく、私がいる試着室に入ってきた！

「ちょ、ちよっと、マキちゃん！？」

「気にしないでいいでしょー？女の子同士なんだし」

「ま、まあそうだけどさっ」

まだほとんど何も着ていない、ほぼ下着姿だったのだが、マキちゃんは気にする様子もなかった。

「わ、ヒナちゃん、すっごい足細い！いいなー！」

「ちょ、声大きいって」

「私なんかこんなだよ、むにー」

と言いながらマキちゃんも自分の足をつまむが、マキちゃんも細いと思う。というか、マキちゃんめっちゃナイスバディー！。制服ではわからなかったが、胸も大きいし。

「……これはえつと、こうやって……」

そこからは真面目に服の着方を教えてもらって、私はなんとかそれを着れるようになった。私には似合わないんじゃないかと思われた服も、マキちゃんは本当に似合っていると言ってくれた。ここは服屋のセンスを信じよう。

サイズもぴったりだったので、それを脱いでジャージを着る。マキちゃんはそれをレジに持って行って、袋詰めをしていてくれるらしい。やはり私はジャージの方が落ち着く。

更衣室を出ると、マキちゃんは笑顔で待っていてくれた。

「それじゃ、お会計、大丈夫？たくさん買ったから、なかなかいい値段するけど」

「それでも、安いを選んでくれたんだよな？」

「うん。……ここだけの話、この店ちよつと高すぎ」

「あはは。店員が言うか」

レジではなかなか見たことがないような金額に驚かされたが、両親の保険金も貯金しているし、父が生前稼いでいた金はかなりの額だ。私はおかげさまで、金に困ったことはない。

「じゃ、がんばってね、ヒナちゃん！応援してる！」

「マキちゃん、ありがとな。助かったよ」

「ん。今度、一緒に服買いに行こうよ？」

「ああ。その時はまたよろしく」

「任せといて！」

「じゃあ、また」

「ばいばーい！」

マキちゃんの優しさに感動しつつ、私は店を出た。

次はどこに行こう。プレゼントの中身は、自分で考えなければ。

何がいいだろうか。冬だし、防寒具的なものが嬉しいだろうか。

上着は明日買いに行くし、他のもの……あいつ、マフラーは持っているし……。

しばらく悩みながら歩いて、ここはやはりいろいろなものを見て決めよう、と決め、町に一つしかない大型のデイスカウトショップに向けて歩き始めた。

歩きながら、私は明日のことを考えていた。明日は昼ごろから一緒に買い物に行くのだろうか。一緒に買い物に行つて、そのあとは……あいつのことだ。きっとウチでだらだらする、なんて言い出すのだろう。

それなら、あいつをちゃんともてなしてやろう。それこそ、ケーキでも焼いてやろうか。

子供みたいに喜ぶあいつの顔が浮かんでくる。思い出して、私もにやにや笑っているかもしれない。あいつに似てきたかもしれないな、気持ち悪い。

でも、いいや。

手が冷たくなって、ジャージのポケットに手をつ突っ込む。白い息を空に向けて吐いて、冬を実感した。

手が冷たい　　そうだ、手袋にしよう。それがいい。

いいアイディアに気持ちは浮ついて、足取りも軽くなる。

それから、買い物楽しくて仕方なかったのを覚えている。デイスカウトショップの防寒具コーナーでダークブラウンの毛糸で編まれた温かそうな手袋を買って、プレゼント用の包装をもらった。店員さんもどこかにっこりと笑っていたのが、少しだけ嬉しかった。

その店の食品コーナーで、クリスマスも近づいて売り切れそうだったケーキの材料を買って、私は家路に就いた。といっても、もときた道を引き返していくだけなのだが。

帰り道、マキちゃんが働いている店を覗きこむと、マキちゃんは一
生懸命働いているようだった。私もバイトでもしてみようかな、な
って思った。

帰り道の電車のホームにて。たくさんの買い物袋を持って電車を
待っていると、ケータイがポケットで鳴動していることに気づいた。
袋を左手に持ち替えて、右手でケータイを取る。画面を見ると、“
俺様は神”と書いてある。レイからか。面倒くさいと思いながら
電話に出た。

「もしもし」

「もしもし、ヒナ？」

相変わらずテンションの高いヤツだ。

『用事、もう終わったの？』

「ああ。今帰り道だ」

『そかそか。何の用事だったの？』

「ん、何でもないよ」

『あー、隠し事はよくないぞ』

「なんだそれ。おまえだって、隠し事してるだろ」

『……え、お、俺が？』

「してるだろ。一昨日の夕方、おまえ何してたよ」

一昨日　つまり、堀田らがケンカしていた時、レイは何をして
いたのかと聞いたのだ。その翌日、ケガをして現れたり、知らない
はずの“第三者”を知っていたり、怪しい点が多々ある。私は、こ
いつが三人組をシメたのだと思っているのだ。

『……ばれてるか』

「当たり前だ。私が、おまえの嘘に気づけないとも思ったか」

『いやー、ヒナには敵わないなあ』

「……あんま、心配かけさせるなよ」

『……ごめん』

心配してくれたの？なんて言うと思ったが、素直に謝られては反
応に困る。

「……まあ、アレだ。怒っちゃいないんだ。ただ、おまえまで停学になったんじゃない、その、さ、寂しいだろ」

『ヒナ……』

「ああもう。だから、あんま危ないことすんなってコトだよ！」

私は気づけば声を張り上げていたが、隣に立っている人が、おほん、と咳払いしたのが聞こえてきて、声のトーンを落とした。

周りには親子連れや若者、老人まで、幅広い年代層の人たちが大勢、電車を待つていた。電車が混むのは嫌だな、なんて思いながら、電話を持つ手を強く握る。

「……マキちゃんがかわいそうだと思っただろ？」

『だって、酷いじゃないか。かわいそうだ』

「わかってるって。もう過ぎたことだ。いいじゃないか」

『……マキちゃんに言わないでくれよ？ 恥ずかしいから』

「言いやしないよ」

それっきり、レイは黙り込んでしまった。電話で黙られても、とも思ったが、私は黙ってケータイを耳に当てて立っていた。

ホームにはどんどん人が入ってきて、見る見るうちに混んでいく。私は最初の方だったからなんとか乗れそうだが、最後尾に近い人は、次の一本じゃ乗れないんじゃないだろうか。

『ヒナ。明日、何時に待ち合わせよっか』

「……ああ、そうだなあ」

『お昼に、家に迎えに行くから』

「そうだな。それぐらいにきてくれ」

『……なんか、久しぶりだね、二人で出かけるなんて』

それもそうだ。私たちは幼馴染だが、知り合ってから二人で遊ぶことなんか少なかった。私が内気だったのもあって、私たちはただの知り合いぐらいの仲だった。

しかし、両親が死んでから、レイはやたらと私に話しかけてくるようになった。最初は気を遣っていたただけだったのだろう。しかし、徐々にレイは遠慮をなくしていった。それは、レイが私に心を開い

てくれた、ということだった。最初は戸惑ったが、私も次第に心を開いたのだった。今思えば、私はそのときからずっと、こいつのことが好きだったんだ。

「そうだな。二人で最初に出かけたのは、バスシユを買いに行った時だっけ」

『うん、覚えてる。懐かしいなあ』

そう。高校二年生になったとき、私もレイも中学時代から履いていたバスシユが小さくなって、二人で買いに行ったのだった。それが、初めてのデートだったのかもしれない。

「……なあ、私はさ」

『ん？』

「ずっと、おまえのこと」

「ごおおおおー。」

ずっと、おまえのこと、好きだ。勇気を出して言った言葉は、電車がホームに到着した音で、かき消されてしまった。

『……ヒナ？ごめん。電車の音で聞こえなかった。もっかい！』

「……で、電車、来たからさ。あとで電話するよ」

『ん、そっか。またあとで』

せつかく勇気を出したのに。

ぶしゅううう、と電車のドアが開き、人の波に流されながら電車に乗る。人でぎゅうぎゅうになりながらも、ドアは閉まり、重たくなった電車は発進した。

言ってしまった。

本当に聞こえていなかったのだろうか。聞こえなかった振りをしているだけじゃないだろうか。聞こえていたのに、聞かなかったことにしようとしていたんじゃないか。

いろいろなマイナスな感情が渦巻き、血の気が引いていく。私はそこでひとつため息をつくつと、

びーっ！びーっ！びーっ！

突然、車内に警告音が鳴り響いた。と思うと、がくん、と電車が

揺れる。窓の外の世界が、上方向にフェードする。

車内に乗客の悲鳴が響きわたる。ゆっくりと電車は左に傾き、倒れていった。人の波に押し流され、私は壁に叩きつけられる。その上にさらに人が重なり、小さな私の体では耐えきれなかった。

めり、めり……ぼぎっ。

肋骨が砕ける音がした。強烈な痛みにも、呼吸ができない。人の波は止まることを知らず、私に圧しかかる。腕、足……いたるところに重みを感じ、やがて私は、吐瀉物の混ざった血を吐いた。

ごぼっ、ごぶっ。

吐いた、と言っても、吐き出す体力は残されていなかった。それは喉の奥に残留し、呼吸器にゆっくりと侵入していった。完全に呼吸を閉ざされ、そこで、私の意識は消えていった。

my lover 9 (前書き)

グロくも何ともないですね

my lover 9

One's end

目を覚ますと、私は白い光に包まれていた。真っ白な世界の中、羽毛に包まれているような、柔らかい感触のベッドに寝ているような心地だった。

何があつたのかは覚えていない。電車が脱線したんだ。脱線事故で私は死んだ。呆気なかった。吐瀉物が私の呼吸を止め、ゆっくりと呼吸を終えた。

そして、ここが天国、といったところか？私の胸には鼓動がなく、自分が死んだのだという事を再認識することができた。

「いらつしゃい、お嬢さん」

柔らかい、温かい声がした。声の主を見ると、真っ白な肌をした、真っ白な長い髪の毛、真っ白な服をまとった女性が立っていた。

きれいな人だ。

私は、その人を見て、瞬間的にそう思った。

「きれいだなんで、そんな。嬉しいわ」

「……え」

思ったことが、聞こえているのか？

「ええ。私は、あなたの心が解るわ。心の声が聞こえるの」

女性はゆっくりと歩み寄ってきて、私が寝ている横に腰かけた。

「見ていたわよ、あなたのこと。がんばったのね。えらいわ。……」

あなたががんばって選んだ手袋、彼、きっと喜んでくれると思う」

「あ……え？」

「あなたの予想は、半分正解。ここは、天国に一番近い所よ。私は、その門番。あなたが天国で暮らす資格があるかどうか、見極める者

よ」

女性は私の頬を撫で、目を閉じた。そして一筋、涙を流した。

「……まだ、あなたはここにきてはいけない」

「“まだ”……？」

「ええ。あなたは、やり残したことが多すぎる。あなたも、わかっているでしょう？」

そう聞かれて、私はいろいろなことを思った。考えた。祈った。

願わくば、私は、

「私は、まだ……」

「いいのよ。甘えて、いいの」

「……まだ、死にたくない」

抑えてきた感情が膨れ上がって、目から、口から、次々に溢れ出した。想いは涙になって、想いは言葉になって、想いは鼓動になって、私の体を動かした。

「まだ、レイに、好きだって、伝えてない。ケーキも作ってない。手袋も、あげてない。服だってせっかく買ったのに、着てない。かわいい、って、褒めてほしい」

嗚咽混じりの声は声になってはいなかった。しかし、女性は黙って、私の体を抱きしめた。

「誕生日おめでとうって、言いたかった。……これからも、一緒にいたかった！」

私の言葉は、目の前の女性が聞いていた。ただ、この言葉を、レイに伝えることはできないんだ。私はそんなことを考えて、また涙が止まらなくなった。

最後に泣いたのは、両親が死んだとき。それ以来、私は涙を流さなくなった。その反動が今になってきたのだろうか。涙も嗚咽も、止むことはない。

「……あなたのこと、ずっと見てきた。お母さんとお父さんが亡くなってから、あなたは彼以外に、誰にも心を開かなかった。でも、友達ができたわね。えらいわ。あなた、恋だってしてる。素敵だわ」

女性は私の涙を指で拭い、自分の額と私の額をくつつけた。

「もう一度、言うわね。あなたはまだ、ここにきてはいけない。ここにきてしまったら、きつとダメになってしまう。あなただけじゃない。レイくん。彼はきつと、全てを失ってしまう」

「……レイが……？」

「ええ。だから、あなたに時間をあげる。……三日だけ、あげるわ。三日で、やり残したことを、済ませてきなさい」

「……え？そ、それって……」

女性が話を済ませると同時に、私の体はまた光に包まれていった。やがて視界は白く染まっていき、

「じゃあ、がんばって」

「うん。……ありがとう」

真っ白に包まれた。最後に視えたのは、女性の柔らかい笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1622ba/>

Refrain my life

2012年1月10日20時59分発行